

食物連鎖と弱肉強食の世界
極寒の地で生きる潜り屋



仲良し
マカロニペンギン



アザラシを説明する
田島さん

飛べない鳥のペンギンは水中で普通五〜一〇分潜る。ペンギンの背中にデータロガーをつけて研究を行った際、オウサマペンギンは最大で三四メートルも潜ることが最近分かった。鳥類を監視した濱尾章二さんによれば、かつてのペンギンは空を飛ぶことができたらしいが、水中のえさを捕るために空を飛ぶための筋肉の代わりに、水の中を泳ぐための筋肉を成長過程の中で発達させたそうだ。

さらに、鳥のほとんどが平たく飛びやすい羽毛であるのに対し、ペンギンはフサフサで保温をするためだけの羽毛だという。また、羽毛の量だけでなく皮下脂肪も多いため断熱性が高い。それはペンギンたちが極寒の地でも生きていけるように進化したからである。濱尾さんは語る。

南極に生息する動物は他にも哺乳類のアザラシやアシカ、セイウチなどがある。「セイウチ

は耳介がない点ではアザラシ科に似ているが、身体の形はアシカ科に似ている。耳介とは外側に突出した部分で音をより集約させる役目があるが、耳介がなくても音は聞こえる」と哺乳類を監視した田島綿子さんは語る。ヒョウアザラシ

などはペンギンを襲うことがあったり、アザラシ科で最大の大きさを誇るミニゾウアザラシは水中で二〇分もとどまることができたり、種類によって特徴も様々だ。また、彼らは大きい体ほど熱が逃げにくいことを利用して保温を行って行っている。水よりも軽い脂肪が発達した筋肉が動物たちが海で泳ぐことを助けている。

古代の巨大ハンター
メガロドンに迫る



大迫力の模型

総監修の篠原現さんが、千数百万年前、推定全長一五から一七メートル程の巨大なサメ、メガロドン

が地球上にいた。会場では顎の復元模型と全長二、五メートルの全体模型と出会う。メガロドンは主に、歯しか残っていない。しかし、その歯の鋭さから肉食だったと考えられる。歯の縁は、ノコギリのよう

隠れた新発見
ユニークな化石に注目



「歴史的な相討ち」と紹介されている魚類

国立科学博物館で行われている「海のハンター展」では、首長竜の化石が展示されている。そのために、抵抗をお勧めしたい。

丸のみして食べていたカラモプレウルスだが、この化石の大きさは、首長竜や珍しい生き物の化石を見ても良いが、ユニークな化石などにも目を向けてみることをお勧めしたい。

の終わりに（二六〇万年前ごろ）に絶滅したと考えられる。会場に足を運べば実感できる、その巨大な体と強力な歯でメガロドンは、多くの生物に恐れられたことだろう。

神奈川県立大船高校
新聞委員会
<http://www.ofuna-h.pen-kanagawa.ed.jp/school-life/arts-club.html#newspaper>

編集 編集部一同

レイアウトデザイン 青山